保育者養成校における音楽の授業「発声の基礎」についての一考察

落　合　知　美

A Consideration on Music Class “Fundamental of Vocal Breath” in Nursery School

OCHIAI Tomomi

キーワード：発声、保育者養成校、授業

はじめに

教育の一環としての授業を考えるとき、それがとても重要であるということは、我々教育に携わる者にとって、自明の理である。元来教育（Education）とは、語源であるところのラテン語（educo）に起因している。（educo）とは、育てる、引き出す、の意味を持つ。教育思想家であるルソー（Jean-Jacques-Rousseau1712-1778）は、人間の能力の内部的発達を自然の教育である。としている。内的発達の育成である。ペスタロッチ（Johann-Heinrich-Pestalozzi1746-1827）なども、人間の教育とは自己の内なるもの、その発展を助ける力である。と言っている。この内在的能力を引き出すことが本来の教育の目的であるとするならば、「人間の持っている内在的能力の一つである“声”という楽器は、教育現場において、授業という限られた枠組みの中で、どのように伸ばされていくことができるのであろうか」という考えの元、本論を展開するものとする。

さて、保育者養成校である本学では、開学時初年度（平成 23 年度）に「発声の基礎」という科目が開講された。音楽の授業でありながら、なぜこの科目が「器楽」そして「声楽」ではなく、「発声の基礎」ということであったのかには理由がある。この科目は、演奏して歌うことのみではなく、より“声”というものに主眼を置いた科目なのである。“声”を発することは、将来教職や保育士を志す者のみならず、多くの職業に従事する者にとって重要である。“声”を研究し、話し方に生かしているのは、芸能人や政治家に多くいる。そして、将来教職や保育士職に従事するであろう本校のような保育者養成校の学生は、“話す声”のみならず、“歌う声”をも必要としている。

本校の授業の一つである「発声の基礎」という科目は、「音楽Ⅱ」「音楽の応用Ⅰ」「音楽の応用Ⅱ」と同じく専門科目の中の基礎技能・教科科目に区分され、かつ選択科目である。では、基礎技能とはどういう科目であるのか？基礎技能科目は、保育を実践する上で必要となる様々な技能のうち、持続的な特定の訓練や体験を必要とするものを学習する科目であり、音楽、造形、身体運動に関する技能などが該当する。また、教科に関する科目は、幼児教育の内容を教科として領域区分したものに係る文化的内容を学ぶ科目であるが、音楽、図画工作、体育などの教科は幼児教育の重要な領域（いうまでもなく、幼稚園教育要領の定める、主として「表現」領域の構成要素としての教科の領域）となっており、その文化的価値を技能として身につけることは幼児教育者の教育技能として不可欠である[1)]。

保育者養成校において、「声楽」や、「歌」に関する科目を設置している学校は多いが、こと「発声」そのものに着目して授業科目を設けている学校はまだ多いとは言えない。最近では、埼玉大学での教員免許状更新システムでの講習システムにおいて、この“発声の基礎”という科目が開講されている。そのような中、本校で“声”そのも

のに主眼を置いた画期的な科目である“発声の基礎”という科目は開講されたのである。

そしてこの持続的な特定の訓練や体験を必要とするものを学習する科目としての、「発声の基礎」は、どのような成り立ちで行われるべきものであるのか。

又、「発声の基礎」という科目は半期のみの選択科目であるが、筆者が担任をしているクラスにおいては全員が履修を選択した。筆者は、その責任を痛感すると共に、この新しく開講された「発声の基礎」という授業が、学生にとってどのような内容が相応しいのか。考察を深めていくこととする。

声を発するとは

“声”とは、人間の喉にある器官（声帯）を通って発せられる“音”のことである。胎児は、4か月の頃から耳が聞こえており、母親の心音や血液の流れる音、そして声を聞いているという。そしてその“声”としての“音”は、大きく分けて二通りの役割を果たす。すなわち『話す声』と『歌う声』である。『話す声』は、普段あまり意識をしない処で使われている。『話す声』は、“声”そのものよりもむしろ“発語”に近いものであると思われる。そしてそれは言葉の滑舌による処が大きいのではないだろうか。本校の学生のような将来年少児に話をする職業に従事する可能性のある学生などは、ことさら大きな声でハッキリと又、少しばかりゆっくりめなスピードで喋る必要がある。理解の遅い年少児にとって、話し方のスピードが速くては、理解ができないからである。更に、大人の中でも、様々な心理的・身体的要因によって大きな声が出しづらい人がいる。筆者は、“発声の基礎”の授業を通して、そのような学生にも、解説を加え、“声”に関する不安を払拭することができるよう心がけた。

保育現場において、「うた」は重要なものである。子どもたちは「うた」から情緒的なものを感じ取り、言葉を覚えたりもする。保育者にとってまちがいなく「歌う声」は、なくてはならないものなのである。その「歌う声」とは、保育者自身の「歌う声」はもちろんのこと、子どもたちの「歌う声」の両方を意味する。人間は“産声”を第一声として持って生まれてくる。人としての最初の作業は、“声”を発することなのである。そして話すことを経て、“歌声”へと変化を遂げていく。しかし、そのような過程を経ても、“声”そのものに注意を払う機会は、一生の内そう多くはない。それどころか、「声なんて生まれつきのものだから変わらないし、話し方も長年話してきている話し方があるのだから変わるはずない」と思っている人が、ほとんどの人なのではないだろうか。

そのように考える人が多い中、この授業を選択した本校の保育者になろうとしている学生にとって、この“発声の基礎”の授業はどのような役割を果たすことができたのであろうか？あるいは、果たすことができなかったのか？そして、その手法のいかんを実際の授業内容と、そのアンケート調査を手がかりに探ることとする。

Ⅰ.「発声の基礎」授業の課題

最初に、筆者が保育者養成校において「発声の基礎」の授業を行う際に留意したことを、項目ごとに列挙し、その内容の考察をすることとする。

（1）発生（発声）の意味

筆者は、生きることを発する＝発生＝発声の意味を学生に説明した。人間が生きているということは、呼吸をしているということである。そして呼吸をするということは、息をしていることと、同義である。その息をしていることの延長線上に、“声”を出すということがある。“声”を出すということは、意識的にも無意識的にも、息をコントロールしているということなのである。“息”という言葉には、しばしば「息が上がる」「息をのむ」「息が詰まる」等の身体と精神を結び付ける言葉がある。言わば“息”は、身体と心を繋ぐ

「道」なのである。そして“声”は、斯様に精神に影響を受けるのである。そこで「発声の基礎」第一回目の授業では、精神を解放させるための、簡単なリズム遊びを、身体を使って行った。遊びは、ゲームとして行ったのであるが、大半の学生が理解できるリズムを用意したにも拘らず、数名の学生は理解できなかった様子で辛そうであった。これは、本来の心身の解放からは遠く、考え直すべき点であるかのごとく思った。しかし教育的効果という面においては、知らないリズムを習得するという良い機会であると捉え、理解の遅い学生には、個人的に何度もリズムを教え込むことを怠ってはならないと痛感した。実際に困難なリズムとしては、シンコペーションのリズム（タ♪・ターン♪・タ♪）や、テンポの速いリズムが難しかったようである。

（2）声について（話し声と歌う声）

話す声と、歌う声の違いは、発語法と発声法の違いである。初語法（ことばづくり）は発声の三原則（呼吸、喉頭の音源づくり、共鳴操作）の共鳴のみに関与する[2)]。よく響いてはっきり分かることばを伝えるためには、構音機能（口の形・舌の動きなど）と共鳴技術をいかにうまく結合できるかが最重要課題になる。筆者は、発語法の訓練のために、北原白秋の五十音の歌を用いた。アナウンサーや、劇団等の発語訓練に使う題材であるが、学生たちはみな、興味深げな表情で発音していた。久しぶりに皆で音読をする懐かしさと楽しさに、表情が和らいでいた。しかしながら、日本語という言語を持つ私たちは、子音に必ず導かれた母音に頼るあまり、言葉の明瞭さに問題点がある。唇や顔をあまり使うことなく発音ができてしまう日本語を使うことによって、表情の乏しい大人が多く存在する。子どもは大人の表情を読んで様々なことを判断していく中で、表情の乏しい保育者であっては、子どもに迷いが生じてしまう。保育者は、表情豊かにそしてハッキリと、発語をする必要があるのである。

五十音の歌　　北原　白秋

水馬赤いな。アイウエオ
浮藻に小蝦もおよいでる

柿の木、栗の木。カキクケコ
啄木鳥、こつこつ、枯れけやき

大角豆に酢をかけ、サシスセソ
その魚浅瀬で刺しました

立ちましょ喇叭で、タチツテト
トテトテタッタと飛び立った

蛞蝓のろのろナニヌネノ
納戸にぬめってなにねばる

鳩ぽっぽ、ほろほろハヒフヘホ
日向のお部屋にゃ笛を吹く

蝸牛螺旋巻、マミムメモ
梅の実落ちても見もしまい

焼栗、ゆで栗ヤイユエヨ
山田に灯のつく宵の家

雷鳥は寒かろ、ラリルレロ
蓮花が咲いたら、瑠璃の鳥

わい、わい、わっしょい。ワヰウヱヲ
植木屋、井戸換へ、お祭だ[3)]

(3) 声について（声の質）

この場合の声の質という意味は、声種のことである。声種は大きく分けて４つに分かれる。女性の最も高いパートであるソプラノ（soprano）・そして低いパートのアルト（alto）。男性の高いパートであるテノール（tenore）・そして低いパートのバス（basso）である。授業においては、ソプラノは（c1 ～ e）、アルトは（f ～ h）、テノ

ールは（c ～ c2)、バスは（D ～ f）というような声種別音域を書いて説明をしたものの、各人の音域がこれに当てはまらないからと言って、自らの声種を断言してはいけない。ソプラノでも低い声が出る人もいれば、アルトでも高い声が出せる人もいる。声種を決定することは、非常に難しい作業なのである。だから、声種を決定する際に重要なことは、声の音色を聞き分けることのできる人に聞いてもらい、決定をするということである。更に声種には、コロラトゥーラソプラノ（coloratura soprano)、・リリコソプラノ（lirico soprano)、ソプラノとアルトの中間音域のメゾ・ソプラノ（mezzo soprano)、テノールとバスの中間音域のバリトン（baritono)、テノールの中でも高い声部のカウンターテナーや中世ヨーロッパで去勢の末作られたカストラートなどもある。

筆者は、授業において、学生に声部の意識を持ってもらうための教材を用意した。教材は「チューリップ」を４声にしたもので、実際に学生に一人１パートを担当させ、歌わせた。学生たちは、このシンプルな教材でのアンサンブルを思いの他難しいと感じ、そして喜んでいた。(「発声の基礎」アンケート調査６・７より）

（４）声について（声と声帯について）

声帯とは、喉から約２センチ下にある、声を出す発声器官である。声帯は、喉頭と軟骨を結ぶ靭帯であり筋肉である。下部には披裂軟骨が左右にあるため、声帯はその披裂軟骨の回転により離れた時の隙間を息が通り、披裂軟骨の回転により声帯が合わさる時に“声”が出る。筋肉である以上、鍛えれば良いと考え、必要以上に鍛えると、声帯は、すぐに不具合を起こす。そしてポリープや、嗄声をひきおこすのである。声帯は呼気により振動を続けるので、常に心臓や肺と同様に重労働をしているのである。更に、人間は日常生活において、“声”を四肢以上に使っていることを忘れてはならない。そして“声”を作る声帯には、敏感で繊細な神経が集中しているため、心理的影響を受けやすいのである。“声”を使う職業の人は、常に心身を健康に保つ必要がある。

（５）声帯の生理（声帯の位置と構造）

授業では、発声器官図を示し、学生たちにも実際にわかるよう解説をした。声は、息の流れと体の動きとの副産物である。そして声帯は心理的影響を受けやすい敏感な器官であることから、だれもが知っている穏やかな曲である「春の小川」を用いた体操を授業では導入した。主に胸を開くような動きを導入し、文字通り胸襟を開いて心の内を解き放ち、“声”という貴重な個人的財産を守ってもらうことを主眼とした。

（６）声帯の生理（声帯を囲むいろいろな器官）

声帯は、モルガニー氏喉頭室の中にあり、“声”を出す役割を果たす。喉頭室が歪んだり、狭まった状態では声帯本来の役割が果たせないのである。そのためには、顎の位置は、突き出したり、逆に引きすぎたり、あるいは伸ばしてみたり、縮めてみたりするような不自然な状態ではなく、常に自然な状態に置いておく必要がある。「発声の基礎」の授業では、顔の筋肉を動かすことにより、顎を自然の状態にできるかもしれないと考え、幼児の遊びやコミュニュケーションにも使える「顔ジャンケン」を導入した。授業内では学生たちは一様にリラックスした表情を浮かべ、楽しそうに取り組む姿が見られた。

（７）声帯の生理（声帯の振動と呼気の関係）

“声”を出すためには、“息”を出さなくてはいけない。“息”を出すためには、“呼吸”をしなければならないのである。この人間が普段当たり前のようにやっている“呼吸”を意識的に行う作業が発声に繋がる。授業では、学生に“呼吸”を意識してもらうために、紙風船を用意した。最初に息を吸い、紙風船を膨らます。学生たちは大きな円を作り、その膨らませた紙風船を息を使い隣へと送っていく。それが一巡したら、次は手で輪を作ってその息を吹きかけた紙風船をキャッチする。最後に学生たちは床に腹ばいになり、中央に置い

た紙風船を垂直に飛ばす。その際、全員の呼気が一定にならないと紙風船は垂直に飛ばないのである。学生たちは、この作業により、呼気と吸気を再び意識することができ、息のコントロールを学ぶことができた。

（8）声帯の生理（音声障害について）

音声障害を起こす理由は二通りである。一つは機能性発声障害である。これは神経系統の異常によって起こり、心因性発声障害などがある。普段のストレスなどからも、発声障害は起こりうるので、“声”を使う職業になる保育者養成校の学生たちにもストレスは大敵である。音声障害を起こす理由の二つ目は、器質性発声障害と言われ、突発性あるいはポリープなど声帯そのものに異常がおこる場合である。多くの場合､ポリープは“声”の使い方を間違えたことによりできる。“声”は我々が思っているよりも遥かに繊細である。将来“声”を多く使って仕事に従事する可能性のある保育者養成校の学生たちは、正しく“声”を使う術を身に付けなくてはならない。“声”は使いすぎると嗄声を引き起こすので、そのような場合は、「無言の行」つまり、“声”出さない日を作る方が良い。

（9）発声法（姿勢）

良い声を出すためには、良い姿勢が大切であると言われる。発声はスポーツと一緒で、フォームが大切なのである。良い姿勢とは、足を拳一つ半位開けて立ち、背骨はまっすぐに保つ。重心は足の親指の付け根に持ってくる。アンダーバストの位置を高く保つことも重要である。更に、天井からの意識を促す“こんにゃく体操”を行った。この姿勢で朗々と歌を歌うための曲として、授業では“フニクリ・フニクラ”を歌わせた。この曲には、合唱曲にも拘わらずソロのパートがあり、各人が自由に声を出すことができるのである。そして、よい“声”で歌うためには、良い姿勢が必要である。

（10）発声法（呼吸法）

発声法と言えば「腹式呼吸が良い」ということは、誰もが耳で知っている。安静時呼吸の場合、男性は比較的容易に腹式呼吸ができるのだが、女性は胸式呼吸に頼ることが多い。胸式呼吸とは、肋骨を上に持ち上げて拡大し、息を吐く時は、胸部を下ろしながら狭めていくという呼吸である。肋骨に囲まれた胸部の拡大には限度があり、肺臓を拡大して呼吸をすることが腹式呼吸である。ではどのようにして学生に腹式呼吸を理解させたらよいのか。最も簡単な方法は、床に寝て、静かにゆっくりと呼吸をすることで、自然と腹式呼吸になる。もしまだ感覚が掴めないようであれば、お腹の上に本などを乗せると解りやすい。

（11）発声法（発声練習）

発声練習をする際の注意点は、息を舌の後ろの方に通すように心掛けることである。鎖骨呼吸では、腱式呼吸をしてしまうので、どうしても深い呼吸ができないので注意が必要である。発声法で大切な事は、母音ラインに関して言えば、次の7点である。①先ず、鼻筋を開けて息を吸う。その時に横隔膜を背中から腰椎の所で話すように吸う。②舌を下げる。③歯の奥を開く。④扁桃腺を左右に開く。⑤背中を意識して息を出すことにより、声帯が付く。⑥その息を副鼻腔に入れ、音程をとる。⑦①～⑥までのことを一度に瞬時に行う。[4)] そして、この事を実践するために、「コンコーネ50番」より、5番をNaで歌わせた。コンコーネは、曲自体非常に音楽的であり、ゆっくりとしたテンポと、起伏の少ない音域で学生たちは気持ち良く発声練習ができたのではないかと思われる。

（12）発声法（児童発声について）

保育者養成校の学生にとって、「発声の基礎」という科目が有効であるという理由の一つとして、子どもの“声”について学ぶことができるということがある。人間が生まれてすぐに発する“産声”がオーケストラピッッチの440kHzの譜面の一点aに近い音であること、乳幼児の最初の声

帯の長さも5mmほどだったものが、就学前には8mmほどに成長し、と共に音域も増えていくこと、そして就学前の子どもの発声に関する問題点等、学生にとって興味深いことが多いのではないだろうか。幼児は歌う際“怒鳴って歌う”子どもが多いが、なぜだろうか。“大きな声で”や“元気に歌いましょう”などと言う保育者の声かけは、果たして子どもにとって有効であるのか。学生たちに問題を提起することは、これからの時代の保育者を育てる際にも、とても役立つ。我が国において“発声法”は、まだまだ新しい分野であり、ごく限られた人が研究を重ねている。しかしそれは少しずつではあるが、日々進歩している分野である。

一般に、「歌を歌うことは体に良い」と言われている。子どもの中には歌っているだけで喘息が治った子がいるという話もあり、将来保育者になる学生は、子どもたちに正しい“声”の出し方“歌”を教えてもらいたいと痛切に感じている。

(13) 楽しく歌おう（日本の歌）

明治初頭、我々日本人は外国人により「日本には音楽がない」と言われてきた。古来、日本では、“歌”とは、“和歌”のことであった。日本人は、言葉に魂が宿るとし、音楽よりも言葉を重視してきた民族なのである。現代の日本の“歌”は明治以降のものであり、現存している、童謡・唱歌の中には、外国のふしに日本語の歌詞を付けたものが多くある。本授業では、そのような歴史的解説も加え、和歌披講の五線譜を使った「君が代」そして国家「君が代」の現曲を聴き比べて貰った。

(14) 楽しく歌おう（世界の歌）

発声に役立つような世界の歌を主に、学生に紹介した。言語は、英語・イタリア語・ドイツ語・フランス語の各歌を、全員で斉唱した。途中それぞれの言語で歌う際の注意をし、学生たちは興味深げに聞いていた。この授業は“発生の基礎”という授業であるが、開始当初の学生たちの「たくさん歌が歌いたい」との声を聞き、様々な“歌”も取り上げてきた。飽くまでも“声”にこだわり声を出し続ける授業を行うというのも、考え方の一つではあったが、こと“声を出すこと”に関しては、“声”を出し続けることだけが上達の秘訣とはならない。“声”は、人間の身体の内にある。そしてそれは、心を伴った非常に人間の奥深くに根差したものであり、根性があれば声が出るなどという単純なものではないのである。学生たちは、良い声を出したいと願うのであれば先ず最初に、心の解放を図らねばならない。心の解放をはかるためにも、楽しく“歌”を歌おうとすることは、とても重要な要因なのである。

(15) みんなで歌おう

学生たちがみんなで楽しく歌を歌うために、授業を通して様々な工夫を凝らしてきた。学生たちが満足して“歌”を歌うためには、心身ともに健康でなければならない。体の健康に関しては、口腔内の健康、声帯はもちろんのことだが、喉のアーチを広く保つことが重要だ。そのためのトレーニングの一環として、ティッシュを口にくわえるトレーニングを行った。トレーニングと言うからには、折に触れて行うべきものであるが、回数の限られた多人数の授業では、トレーニングの方法を一回紹介するに留まった。その他いくつかの咽の余分な力を取るトレーニング法を授業内で紹介した後、最後の授業では、みんなで楽しく歌をうたうために時間を費やした。人間は楽しく感じることにより、リラックスすることができ、より力を出すことができる。“声”を出すという、なにげないことが実は日常の生活に繋がっているのである。

Ⅱ．アンケート調査

本研究で使用したアンケートは、「発声の基礎」の授業の一環として行ったものである。本授業のねらいは、「人間の“声”というものに焦点を当て、無理なく声を出す方法を学ぶ」ということである。そして、その延長線上で「日本の歌」だけ

ではなく、「世界の歌」にも触れ、最終的には楽しく「歌」を歌うことができるようになるということが、本授業開講当初の目標であった。

次に、実施したアンケート調査の詳細について述べる。調査対象とした学生は、平成23年度「発声の基礎」の授業を履修した学生45名である。アンケート調査は、全授業終了後一週間以内に実施した。P.98 ～ p.99に調査に使用したアンケートの原本を示す。

Ⅲ．アンケートの集計結果および考察

（1）「発声の基礎」という授業科目のイメージ

学生は、最初に「発声の基礎」という授業科目を目にした時、どのようなイメージを持ったのか。多かったのが、楽そう（18%）オモシロそう（16%）な科目であることの順であった。次に、大変そう（15%）だというイメージを持った学生がいたのである。ほとんどの学生にとって、発声の分野はまだ、未知の分野である。そしてその不安感により、このような当初のイメージを持ったものと思われる。次に、大きな声で話すことができ、歌うことができるようになることである。学生は、最初に授業を取る際、期待を持って授業に臨んでいる。特に、大学では自分自身で授業を選択できるようになるので、年度当初の授業イメージは、重要である。教員は学生の期待を裏切ることなく、最終授業まで遂行できることが望ましいと思う。声を大きくするということは、一人ひとりの発声器官や身体の違いがあるので、一概に全員がすぐにできるというものではないが、大きい声と、後ろまで響く通る声には、違いがある。通る声を、大きい声とするのには、あまりに短絡的であり、本授業では、通る声を工夫することにより、いわゆる大きな声を掴んだ学生も多くいた。

（2）あなたの性格はどちらかというと・・・

この項目では、本校の学生の気質がわかり、興味深かった。多くの学生が、“声”を出すことには不向きのどちらかというと引っ込み思案であったのだ（39%）。そして普通・どちらともいえないが（27%）やや積極的は（23%）であった。本授業を選択した学生たちは、ふつうもしくは積極的な性格である学生の他に、消極的な自分の性格を変えたいと選択をした学生も多くいたのではないかと考えられる。

（3）あなたは元々人前で話すことが好きでしたか？

この問いかけには、あまり好きではないと答えた学生が、実に半数を超えた。どちらとも言えないを含めると約7割の学生が、話すことが苦手である。本授業では、多少なりとも改善が見られたという声もコメントに多くあった。

（4）あなたは元々人前で歌うことが好きでしたか？

この問いかけも、(2) と同様あまり好きではないとする学生が、36%もいた。どちらとも言えないとやや好きを合わせると、やはり約7割の学生が、それほど歌うことも好きではないのである。この歌うことが好きではない学生たちが、最終的にはとても楽しかったと感ずる授業を、筆者は目指した。

（5）「発声の基礎」で印象に残った項目は？

授業内容に関する問いかけに対する回答は、教員にとってはとても大切な財産となる。印象に残るということは、それだけ学びが多かったと言えるのではないだろうか。本授業のタイトルである「発声法」では、多くの学生が勉強になったと答えていた。只本来は「発声法」は教える側が一人一人の声を聞き、マンツーマンで行うことがベストであるのだが、この選択科目では、人数の多いクラスで実に33人の学生に発声を限られた授業時間内（90分）に教えなくてはいけないという問題があった。大人数ということで、個人の“声”が聞けなかったことが、この授業を行って、残念なことであった。その他、毎時間広いホールの床に寝るという腹式呼吸を自覚させるための方法は、13時10分開始の授業に当たった学生には、良かったようであった。広いフロアに大の字になって

深呼吸をする行為は、入学直後の緊張感から唯一解き放たれる時間であったのではないかと思われる。又、保育科の学生には児童発声なども、やはり興味深く、勉強になったようである。

（6）「発声の基礎」で印象に残った曲目は？

この項目では、筆者が考案した4声のチューリップが思いのほか好評であった。4人で音を取らせるために作ったが、わかりやすい曲でありながら、歌うことは難解であったということが、意外に感じたのかもしれない。そして、アンケート調査の曲目には入れなかった基礎教則本の、「こどものソルフェージュ」「コンコーネ50番」が、ピアノ初心者にもとても役立ったと好評であった。そして更に、他の音楽の授業「音楽Ⅰ」でも取り上げてほしいという声も上がった。多くの本校の学生たちは、子供の頃から長年音楽の勉強をしてきたわけではない。正確な音楽技術の習得には、長い年月を要する必要があるということは、本格的に音楽を勉強してきた人にとっては、明白な事実なのである。筆者としては、本授業が学生たちにとって、これから先長く音楽を学んでいくきっかけの一つと捉えていただけると幸いに感じる。その他の印象に残った曲は、“夏の思い出”“赤とんぼ”“翼をください”などの合唱曲が、学生たちには馴染みがあるようで好評であった。更に、昔からある“見上げてごらん”は、今年の東日本大震災後に良く巷で流れていたので印象深く、手遊び“鬼のパンツ”の原曲は、“フニクリ・フニクラ”であることなども勉強し、印象に残ったようである。

（7）「発声の基礎」でもっと詳しくやりたかった曲目は？

学生たちがもっと詳しくやりたかった曲は、印象に残った曲と一緒であり、学生たちが好きな曲であった。好きな曲をもっとやりたいと思うことは、自然なことであろう。

（8）「発声の基礎」で不要と思われる曲は？

学生たちは、どの曲も不要であると考えないことは、驚きであった。新しいことを学ぼうという真摯な姿勢が窺われた。

（9）あなたは何故「発声の基礎」を履修しましたか？

この問いかけには、歌がうまくなり、声が出るようになる、そして楽しそうだから、という理由が最も多かった。意外にも、たまたま時間が空いていたからという声は少なく、更に他のクラスなどは、金曜日の5限目であったにも拘わらず、上記のような明確な理由を持って履修を決めた学生が多く、これらの学生からは本来の学びに対する実直さを感じた。

（10）「発声の基礎」の科目は、保育現場でどのように役に立つと考えますか？

学生は、将来の保育者となった自分をイメージしている。保育者は子どもたちの前に立ち、大きな声で話をしたり、歌を歌ったりしなくてはならない。その際に、大きな声を出すことで、咽を痛め、間違った発声で子どもたちに歌わせることにより、子どもに嗄声を引き起こしてしまう。本授業では、知らないことで引き起こされる“声”のトラブルを回避することができると、学生たちは感じた。又、アンケート結果（3）（4）でも述べたように、7割もの学生が、人前で話すことや、歌うことが苦手である。その克服ができたと感じた学生がいた。何人もの学生が、人前で話すことや歌うことが苦痛でなくなったと感じていることは、授業を提供した教員としては、嬉しいことであった。よく言われる、お腹から声を出すということの意味も理解できるようになった。更に、歌える曲が増え、現場に役立つと感じた学生や、ソルフェージュをすることで、ピアノが楽になったとする学生も見られた。

（11）「発声の基礎」を受講して、あなたは何かを得られましたか？

学生たちは、授業を受けるからには何かを得たいと思っている。それは、勉強になり知識が増えることでも良いし、情緒の面での健やかさであっ

ても良い。この授業では実に7割の学生が「何かを得ることができた」と回答している。何かとは、発声の方法であり、声の出し方であり、声に関することの学びであったことは、言うまでもない。授業を行った教員としては、更なる授業の工夫をし、誠実に授業を行って行きたいと考えている。

Ⅳ. まとめ

以上のことがらより、本研究で実施したアンケート調査の結果を整理することにより、以下の結論が得られた。新幼稚園教育要領、新保育所保育指針では、「保育者の専門性の向上」が明確にされている。保育者には、様々な専門性が要求されているが、中でも「音楽」は人間の長年に渡る労力・能力・体力・知力がすべて加味されている科目である。本授業「発声の基礎」では、音楽的な“声”のみならず、発語的な“声”にも視点を割き、考察を進めた。又、基礎技能・教科科目である本授業での持続的な特定の訓練や体験では、数々の題材を学生に提供することができた。そして90分の授業という限られた枠組みの中で、“声”という楽器をより伸ばすためには、筆者は、まず学生の「意識改革」を試みた。その結果、本授業開講当初の目標であった「無理なく声を出す方法を学ぶ」こと、そしてその延長線上の「日本の歌・世界の歌」にも触れ、最終的に楽しく「歌」を歌うことができるようになった。以上のことが、87%の結果で達成することができた。本授業の深まりを願い、次年度の課題は、「より専門性を深めるための授業を展開する」ということが必要であることを再認識した。

引用文献

1) 埼玉東萌短期大学設置認可申請書類、p.1、2010年
2) 米山文明：言葉と音楽、日本語学第27巻第4号、4月号、2008年4月10日、p.51
3) 藤原　勇：初めての歌声づくり、サーベル社、2008年8月20日、p.41
4) 落合知美：中田喜直の芸術歌曲に関する考察、学校法人　小池学園第3号研究紀要、2009年8月31日、p.88

「発声の基礎」アンケート

1.「発声の基礎」という授業科目を最初に見た時、どんなイメージを持ちましたか？
（思い当たる項目すべてに〇をしてください）

①　きれいな声で話すことができるようになる　②　話す声を大きくすることができる
③　きれいな声で歌うことができるようになる　④　大きな声で歌うことができるようになる
⑤　子どもの前で話すことが得意になる　⑥　子どもの前で歌うことが得意になる
⑦　カラオケが得意になる　⑧　大変そう　⑨　楽しそう（オモシロそう）
⑩　楽そう

2. あなたの性格はどちらかと言うと・・・(1つ選んで〇をしてください)

①　引っ込み思案　②　どちらかと言うと引っ込み思案　③　普通である・どちらとも言えない
④　やや積極的　⑤　積極的

3. あなたは元々人前で話すことが、好きでしたか？

①　嫌い　②　あまり好きではない　③　どちらとも言えない　④　やや好き
⑤　好き

4. あなたは元々人前で歌うことが好きでしたか？

①　嫌い　②　あまり好きではない　③　どちらとも言えない　④　やや好き
⑤　好き

5.「発声の基礎」の授業の中で、印象に残った項目（勉強になった）に〇をしてください（思い当たる項目すべてに〇をしてください）

①　肩たたきリズム伝言ゲーム　②　きらきら星ウォーキング　③　曲名当てクイズ
④　五十音の歌（北原　白秋）　⑤　ボディーパーカッション（焼肉）　⑥　音声障害
⑦　“歌う声と話す声”　⑧　声帯の図　⑨　歌声の質（ソプラノ・メゾソプラノ・アルト・テノール・バス）
⑩　発声法（姿勢）　⑪　呼吸法（二人ペア）　⑫　腹式呼吸を自覚する（床にあおむけに寝る）
⑬　息の話（ティッシュ・紙風船）　⑭　胸声区と頭声区　⑮　体操（春の小川・ドレミの歌を使った）
⑯　声帯を囲むいろいろの器官図　⑰　顔ジャンケン　⑱　鎖骨呼吸（腱式呼吸）
⑲　児童発声　⑳　喉のアーチ（割りばし・ティッシュ・ミラー）を使った発声
上記以外の物があれば、自由に書いてください。

6.「発声の基礎」の中で、印象に残った曲目を挙げて下さい（思い当たる項目すべてに〇をしてください）

①　チューリップ　②　犬のおまわりさん　③　フニクリ・フニクラ　④　君が代
⑤　にゃにゅにょの天気予報　⑥　鬼のパンツ　⑦　夏の思い出　⑧　赤とんぼ
⑨　見上げてごらん　夜の星を　⑩　故郷の人々　⑪　翼をください　⑫　エーデルワイス
⑬　世界中のこどもたちが　⑭　ほたるこい　⑮　Caro mio ben　⑯　はたけのポルカ
⑰　のばら　⑱　Sur le pont d'Avignon　⑲　踊り明かそう　⑳　乾杯
上記以外の物があれば、自由に書いてください。(コンコーネ・ソルフェージュ等)

7. 質問５・６の中で、もっと長く（詳しく）やりたかった物を、３つあげてください。
（なければ結構です）

①
②
③

8. 質問５・６の中で、不要と思われるものを、３つあげてください。（なければ結構です）

①
②
③

9. あなたは何故、「発声の基礎」を履修しましたか？（思い当たるすべての項目に〇をしてください）
① たまたま時間が空いていたから ② みんなが履修するので ③ 声がでるようになりたいから
④ 歌が上手くなりたいから ⑤ 楽しそうだから ⑥ 保育現場で役立ちそうだから
⑦ カラオケが上手になりたいから ⑧ 珍しい科目だから

10. ９番の質問で、⑥保育現場で役立ちそうだからと答えた方は、授業を受けてみて、どのように役立つと考えましたか？
自由に記述してください。

11.「発声の基礎」の授業を受講して、あなたは何かをえられましたか？（思い当たるすべての項目に〇をしてください）

① あまり何も得られなかった（勉強にならなかった） ② 少し得られた（少し勉強になった）
③ どちらとも言えない ④ たくさん得られた（いろいろと勉強になった） ⑤ よくわからない

12. 最後に、授業は楽しかったかどうかを、教えてください。

① 楽しくなかった ② 少し楽しかった ③ どちらとも言えない ④ 楽しかった ⑤ とても楽しかった

みなさん　ご協力ありがとうございました。これからも、色々な場面で、この授業を思い出していただければ幸いです。

「発声の基礎」アンケート集計結果（1/4）

1．「発声の基礎」という授業科目を最初に見た時、どんなイメージを持ちましたか？

1．きれいな声で話すことができる
2．話す声を大きくすることができる
3．きれいな声で歌うことができる
4．大きな声で歌うことができる
5．子どもの前で話すことが得意になる
6．子どもの前で歌うことが得意になる
7．カラオケが得意になる
8．大変そう
9．オモシロそう
10．楽そう

項目	人数	人数（%）
1	14	8
2	31	18
3	16	9
4	27	16
5	9	5
6	14	8
7	15	9
8	4	2
9	33	19
10	8	5
小計	171	100

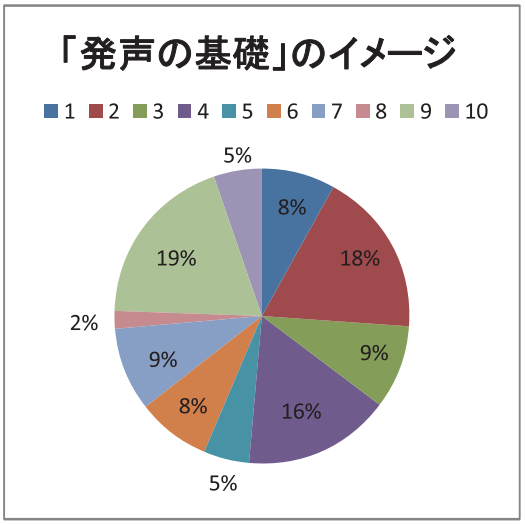

図1.「発声の基礎」のイメージ

2．あなたの性格は？

1．引っ込み思案
2．どちらかと言うと引っ込み思案
3．普通・どちらともいえない
4．やや積極的
5．積極的

項目	人数	人数（%）
1	2	5
2	17	39
3	12	27
4	10	23
5	3	7
小計	44	100

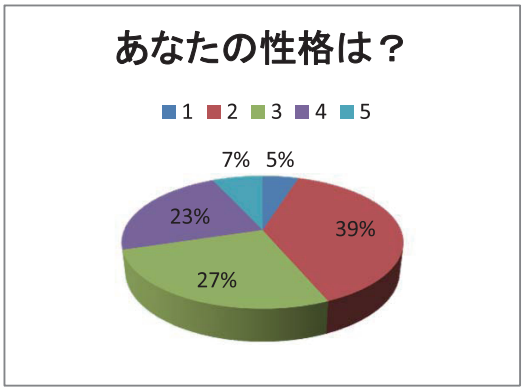

図2．各自の性格判断

3．あなたは元々人前で話すことが、好きでしたか？

1．嫌い
2．あまり好きではない
3．どちらともいえない
4．やや好き
5．好き

項目	人数	人数（%）
1	4	9
2	24	55
3	9	20
4	3	7
5	4	9
小計	44	100

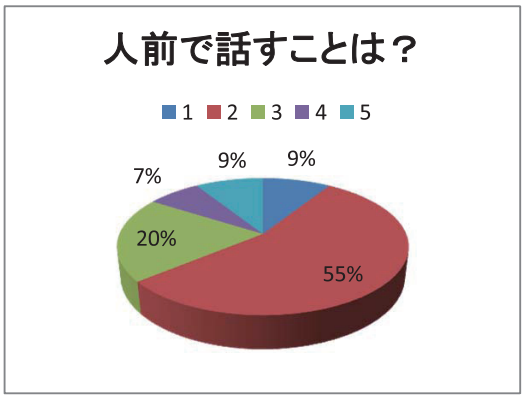

図3．人前で話すことについて

「発声の基礎」アンケート集計結果（2/4）

4.　あなたは元々人前で歌うことが、好きでしたか？
　1.　嫌い
　2.　あまり好きではない
　3.　どちらともいえない
　4.　やや好き
　5.　好き

項目	人数	人数（%）
1	7	16
2	16	36
3	8	18
4	8	18
5	5	11
小計	44	100

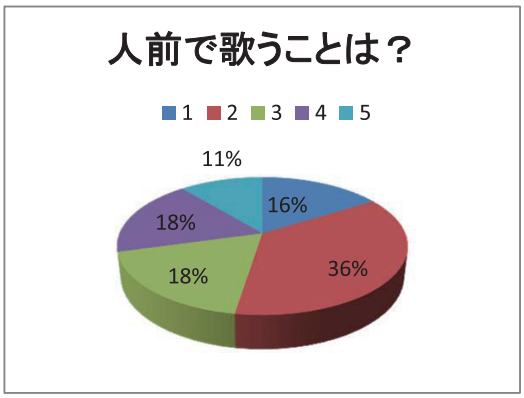

図4．人前で歌うことについて

5.　授業の中で印象に残った項目は？
　1.　肩たたきリズム伝言ゲーム
　2.　きらきら星リズムウォーキング
　3.　曲名当てクイズ
　4.　五十音の歌（北原　白秋）
　5.　ボディーパーカッション
　6.　音声障害
　7.　“歌う声”と“話す声”
　8.　声帯の図
　9.　歌声の質（S・A・T・B）
　10. 発声法（姿勢）
　11. 呼吸法（二人ペア）
　12. 腹式呼吸の自覚（床に寝）る
　13. 息の話（ティッシュ・紙風船）
　14. 胸声区と頭声区
　15. 体操（春の小川・ドレミの歌）
　16. 声帯を取り囲む器官図
　17. 顔ジャンケン
　18. 鎖骨（腱式呼吸）
　19. 児童発声
　20. 喉のアーチ（ミラー等の発声）

項目	人数	人数（%）
1	14	5.1
2	7	2.5
3	3	1.1
4	10	3.6
5	28	10.1
6	2	0.7
7	11	4
8	15	5.4
9	16	5.8
10	27	9.8
11	22	8
12	34	12.3
13	18	6.5
14	6	2.2
15	7	2.5
16	8	2.9
17	15	5.4
18	8	2.9
19	6	2.2
20	19	6.9
小計	276	100

6.　授業の中で印象に残った曲目は？
　1.　チューリップ
　2.　犬のおまわりさん
　3.　フニクリ・フニクラ
　4.　君が代
　5.　にゃにゅにょの天気予報
　6.　鬼のパンツ
　7.　夏の思い出
　8.　赤とんぼ
　9.　見上げてごらん
　10. 故郷の人々
　11. 翼をください
　12. エーデルワイス
　13. 世界中のこどもたちが
　14. ほたるこい
　15. Caro mio ben
　16.はたけのポルカ
　17. のばら
　18. Sur le pont d’Avugnon
　19. 踊り明かそう
　20. 乾杯

項目	人数	人数（%）
1	25	8.7
2	9	3.1
3	27	9.4
4	8	2.8
5	14	4.9
6	25	8.7
7	9	3.1
8	22	7.7
9	20	7
10	8	2.8
11	30	10.5
12	15	5.2
13	16	5.6
14	11	3.8
15	10	3.5
16	19	6.6
17	7	2.4
18	6	2.1
19	3	1
20	2	0.7
小計	286	100

「発声の基礎」アンケート集計結果（3/4）

9.　何故、「発声の基礎」を履修しましたか？

1.　たまたま時間が空いていた
2.　みんなが履修する
3. 声が出るようになりたい
4. 歌が上手くなりたい
5. 楽しそう
6. 保育の現場で役立つ
7. カラオケが上手くなりたい
8. 珍しい科目

項目	人数	人数（%）
1	2	1
2	5	4
3	32	22
4	35	24
5	35	24
6	24	17
7	5	4
8	6	4
小計	144	100

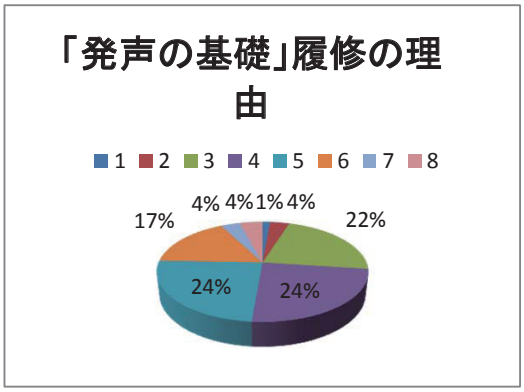

図5.「発声の基礎」履修の理由

10.　前の質問で、⑥を選んだ方は、どのように役立つと考えましたか？

1) 歌える曲が増え、現場で役立つと考える。
2) 人前で歌えるようになる。
3) みんなに向かって大きい声で話せる
4) カラオケとは違う、人前で歌えるくらい、歌が上手くなると思った。
5) 音がとれるようになる。子供たちとの会話や子供たちの前での歌を歌うことなど声を出すことが多くなるので声の出し方の勉強をしたかった為。現場に立つ際の基礎になる？
6) 子供と歌う時に、きれいな声で先導してあげられるかなと思った。
7) 人前で話すこと、歌うことが苦痛でなくなる。話すのも苦手だが、人前で歌うこと。カラオケ大嫌いです。最後に少し楽になりました。
8) 声を大きく出す方法を学び、役立ちました。
9) ソルフェージュはピアノの練習にとても役にたちました。腹式呼吸も今まで胸式だったので、喉が痛くなく声を出せるようになったので、子供に教えられそうです。
10) 中学生以来お腹から声を出すことをしていなかった。授業で思いた。歌の時でけでなく、たくさんの子供の前で話しをする時に必要
11) 現場で役立つと思った
12) 子供に歌を指導する時に、発声のしかたなどは、役に立つと思いました。
13) 人前で発声するのが苦手なので、保育現場で発声できると思った。
14) 声を出すときや曲を人前で歌うことに慣れてないので、現場で役立つと思った。とおる声の練習になった。
15) 楽しく歌うこと、声の出し方がわかって子供たちにも音楽の楽しさを伝えられると思いました。
16) 大きな声とよく通る声は違うことがわかりました。大きな口を開け子供に分かりやすい言葉ではっきりと歌い話すことが重要だと、気づきました。
17) 幼児の歌をいろいろと知ることができた。人前で大きな声で歌うことができた。
18) 大きな声が出しやすくなることで、子供たちのお手本となるから。
19) いろいろな曲が歌えて保育現場で役に立つと思った。

「発声の基礎」アンケート集計結果（4/4）

11．「発声の基礎」を受講して、何かをえられましたか？
1．得られなかった
2．少し得られた
3．どちらともいえない
4．たくさん得られた
5．よくわからない

項目	人数	人数（%）
1	0	0
2	12	28
3	2	5
4	29	67
5	0	0
小計	43	100

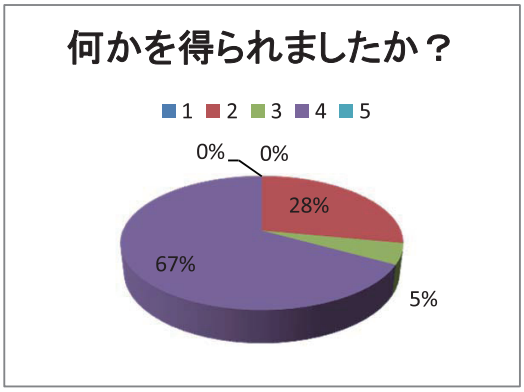

図6．授業から得られたこと

12．授業は楽しかったですか？
1．楽しくなかった
2．少し楽しかった
3．どちらともいえない
4．楽しかった
5．とても楽しかった

項目	人数	人数（%）
1	1	2
2	1	2
3	4	9
4	8	19
5	29	67
小計	43	100

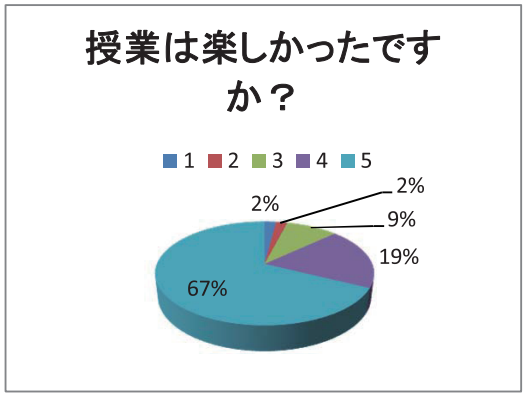

図7．授業の感想

（埼玉東萌短期大学 教授　落合知美）